

特集「あの日の空」を読んで

雄山中学校 一年 高浦 和奏

キッかけは、新聞だった。小学生だった私は、前日に出かけた花火大会の記事に目をとめ、富山大空襲の事を知った。祖父から、富山の空が真っ赤に見えたことや、いここが焼夷弾に当たって七くなっただことを聞いた。戦争は、私の中で「本当にあったこと」として、近くに感じられるようになった。

今三は、戦後七十年。特集「あの日の空」の連さいを読んだ。第八章は、富山大空襲の夜の様子が語られていて、ドキドキしながら読んだ。特に心に残ったのは、村山さんの「焼夷弾は『ヒュルヒュル』と音を立てて落ちるが、近くに迫ると『シヤシヤシヤ』に変わる」という話だ。「聞き分けられん人は当たって死ぬがよ。」という言葉にゾワツとした。生きるか死ぬかのギリギリのところを生き抜いてこられた人の言葉だと思った。

八月一日の特集では、富山大空襲を体験し



た人の話が顔写真付きで紹介されていた。地図もあった。空襲の被害を受けた場所は、普段よく通る場所だった。あの場所で、こんなひどいことが起きたんだ……。私は、体験談を読みながら想像した。水をかぶり、夢中で走る人の顔が浮かんだ。泣き叫ぶ子供たちの声が浮かんだ。子供を守ろうと強く抱きしめたまま亡くなった母親の姿が浮かんだ。遺体が流れてくる川は、怖くて想像できなかった。「私だったら」と考えようと、自分の家族をその場所に置いてみようとしたが、あまりにもおそろしくて、やめた。「絶対に嫌だ」と思った。

歴史の学習で、いろいろな時代の戦いについて学ぶが、実感がともなわない。その時代に生きていた人たちのことを身近に感じていないからだと思う。一方、そこに生きていた人たちの顔を見て話を読むと、白黒の写真がカラーの動画になったように、自分の中で動き出す。ぎせいになった人たちや家族の気持ち



ちを想像すると、じっとしていられない気持ちになる。

戦後七十年たち、戦争を体験した人たちが年をとって、直接話を聞くことが難しくなっていく。私たちは、戦争の話を通じて聞くことができる最後の世代かもしれない。しっかりと聞いて、大人になったら自分の子供に伝えていきたい。

記事で、藤井さんは、「戦争を二度とおこさないためには、他者を思いやり、自分を律するほかない」と語っておられる。互いの文化や考え方のちがいを認め合うこと、相手の痛みを自分のことのように感じること、他人を不幸にしてまで自分が得をしようと思わないことが大切だと思う。

私たちは、二度と戦争をおこしてはいけな
い。幸せな家族をばらばらにしてはいけな
たくさんの人の未来をうばってはいけな
私たちは、しっかり学び、考え、話し合っ
て平和な未来をつくっていきたい。

